

NAI Newsletter No. 13 & 14 March 2006

ISSN 0918-7448

人類学研究所 通信

第 13・14 合併号

Nanzan Anthropological Institute

南山大学人類学研究所

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

Tel. 052-832-3111 (Ext. 580)

2006 年 3 月 20 日発行

E-Mail: nuai@ic.nanzan-u.ac.jp

発刊に当たって

南山大学人類学研究所所長 坂井信三

今年度、人類学研究所では太平洋戦争終結から 60 年という年にあたって、かつて日本の占領・植民地支配を受けた国々の人々が、その記憶をどのように保っているか、それが現在のそれらの国々と日本との社会的・文化的関係にどのように影響しているかというテーマをめぐって、一般向けの連続講演会を企画した。韓国、台湾、南洋諸島そして中国を舞台にした講演は、一般市民の方々にも強い関心を引き起こしたようで、毎回多くの参加者を集め、熱心な質問と好意的な感想をいただいた。

講演会に足を運んでくださった方々には、65 歳以上と思われる高齢の方がとくに目立った。この講演会を企画したペトロ・クネヒト研究所員自身も、やはりその方々と同世代である。20 世紀という時代、戦争と植民地支配によって人類がいかにお互いを苦しめ傷つけてきたか、この世代の方々は身をもって知っている。その方々が戦争をふり返る感慨は本当に深いものがあるのだろう。

(p2 へ続く)

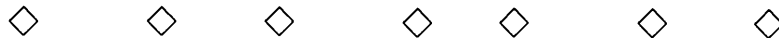
目 次

発刊にあたって	坂井信三	1
さまよえる「鬼神」—日本の植民地支配と「近代化」	岡田浩樹	3
研究所の活動その他		15

一方講師として話をしてくださった先生方は、30代、40代という戦後も安定期に入った時代に成長した世代が中心だった。「戦争を知らない子どもたち」と自己規定した団塊の世代よりももうひとつ若い世代である。彼らにとって、日本による占領・支配はそれを語ってくれるフィールドの人々の肉声をとおして、書物で読んだ知識をこえてはじめて現実のものとなった。毎回の話をとおして、フィールドワークをおこなった講師の方々が、日本とアジアの国々の不幸な歴史的邂逅の記憶に、困惑と同時にある意味で新鮮な驚きをもって出会った様子がうかがえた。またそのことが講演を聞く私たちに、戦後60年にわたって日本人自身が支配・占領時代からいかに目をそらせてきたのかを気づかせることにもなった。その意味で、この連続講演会は戦後日本という社会の存立根拠がどれほど不確かなものなのかを反省させる機会にもなったのである。

すでに長い歴史をもつ南山大学の人類学研究所だが、今年度の連続講演会は私にとって、現在の日本の社会のなかで人類学と人類学者が一般市民に対して果たすべき責任を考えさせてくれるものだったと思う。大学に設置された研究所である以上、高度に専門的な学術研究に従事することが私たちの任務であることは当然だが、同時にその成果を社会の多くの人々に還元し、またそこから時代の深い要請をくみ取ることが重要なのだろう。研究所としてだけでなく、人類学という学問そのものの活路を探っていくためにも、このようなインタラクションが深い意味をもつにちがいない。

私はそれほど深い自覚もなしに今年度から人類学研究所の所長を拝命したが、学部学科での教育とはちがった形で、研究所の活動と社会との関わりを考えるようになった。今回の連続講演会を企画してくださったペトロ・クネヒト先生は、今年度をもって定年退職される。今後人類学研究所として、先生の長年のご尽力によって国際的な雑誌に成長した *Asian Folklore Studies* の刊行を継続してだけでなく、先生の積み上げてくださった活動をもとに、社会との関わりをもっと深めていく方向を探っていきたいと考えている。



さまよえる「鬼神」－日本の植民地支配と「近代化」

岡田浩樹（神戸大学国際文化学部助教授）

1. はじめに

今日の韓国社会は、もはや「伝統社会」と見比べることがすでに困難である。それはあたかも大画面に次から次へと映し出されるビデオクリップを見るかのようであり、まぶたの裏に残像は残るものの、それがいったい韓国社会のどのような側面を現しているのか、何を意味しているのか、引き比べて検討する時間がないまま、次の画面に移りゆく。

社会・文化現象に目を転じると、日本社会における問題なのか、あるいは他の先進諸国で起きつつあることなのか、すぐに区別がつかないことも多い。東南アジアまで及ぶ「韓流ブーム」、NGO、NPO、活発な市民団体の活動、環境問題、家庭内暴力問題、外国人労働者問題など、1980年代までの韓国研究者が夢想もしなかった社会・文化現象が起きつつある。このように日本と韓国が共通の問題を抱えていること自体、今日の東アジア諸社会がグローバル化の波に洗われ、急激な変化の過程にある状況を端的に示している。もはや韓国社会は1980年代まではその名残がかいま見られた「伝統社会」とは異なる別の社会のようにも見える。

この一方で、韓国では2006年3月2日に「日帝強占下 親日反民族行為真相解明に関する特別法」（以下、「親日法」と省略）が成立した。この法律は日本が朝鮮を統治していた時代の「親日・反民族行為」を調査し、歴史に残そうという意図をもっている。「親日反民族行為真相究明委員会」が設置され、植民地下の親日行為者に対する調査活動を行うものとされている。

「親日派」として対象になるのは、当時の朝鮮総督府など行政機関で一定の地位にあった文民・軍人や、当時の独立運動家への弾圧、戦時中の戦意高揚のための活動を行った者など、広範囲に及ぶ。ただし、「親日派」の当事者はすでに死亡しているか、もしくは高齢であり、この背景には、日本の植民地支配時代の人的遺産を批判しつつ、活用し、社会建設や経済発展を成し遂げてきた保守層を「親日派」として否定する意図があるとも言われている。

このような「伝統社会」から大きく変貌し、価値観も行動様式も大きく変化したかのように見える韓国社会と植民地支配を今日にいたって払拭しようという特別法とのギャップは、もちろん単純に解釈できない問題であり、複雑な要因が絡み合っている。例えば、韓国の「親日法」に関しても、現政権が日本の植民地支配期に陸軍士官学校に行ったという履歴をもった朴正熙元大統領の娘で

あり、野党の朴槿恵ハンナラ党代表を攻撃する政治的意図がある¹とも言われる。しかしながら、この背景には、解放後60年が経過し、日本の植民地支配の影響に対する反発—つまり単なる「反植民地主義」にとどまるのではなく、植民地支配がもたらした社会的・文化的影響を清算しようという動きがあると言えよう。

ところで、60年間というのは、干支が一巡りする「還暦」であり、東アジア諸社会において一応の区切りとされる期間である。また1世代を20年とすれば、3世代が経過しつつあることに相当し、歴史的な記憶もある程度の風化は免れない期間であろう。にもかかわらず、なにゆえ韓国では植民地支配期の記憶があらためて呼び起こされ、外交関係だけでなく、国内問題としても浮上するのであろうか。

韓国の民俗的な観念のひとつに「鬼神」という霊観念がある。この「鬼神」はシャーマニズムと深く関連し、多くは儒教の祖先崇拜から排除された死者、例えば未婚のまま死亡した女性の靈魂が「あの世」に行くことができないまま「この世」をさまよう「鬼神」となって生者に害をなすとされる。

あたかも韓国社会にとって植民地支配の経験は「成仏できない『鬼神』」であるとも言えよう。この「鬼神」はどのように生み出され、またなぜ「成仏」できないのか、またなにゆえこの「鬼神」が解放後60年経過しつつある今日、さまよっているのであろうか。ここでは、ある韓国人僧侶を取り上げ、この「鬼神」を検討する手がかりとしたい。

2. ある朝鮮人僧侶における「近代」

ここで取り上げるのは、韓国曹溪宗（後に太古宗に所属宗派を変えるが）の僧侶A師の事例である²。A師は、韓国忠清北道X郡X邑にあるY寺の前住職であり、現在Y寺にはわずかな記録が残されている。

このA師は、植民地期に日本に留学した僧侶の一人であり、植民地期の変動が朝鮮社会、そして解放後の韓国社会にどのような文化的社会的な変容をもたらしたかを考える手がかりとしてみたい。とはいえ、このY寺の前住職A師は、

1 『朝鮮日報』2004年7月13日

2 本稿の元となった資料は1990年から半年間Y寺に滞在し、現地でのフィールドワークを行った際に、A師の妻であり、現在のY寺住職のB師ハルモニから提供された資料に基づいている。その後、2-3年に一度Y寺を訪れ、若干の聞き取り調査を行った。ここでB師とそのご家族に感謝するとともに、匿名で原稿を書くことのお詫びを申し上げたい。

朝鮮仏教史、韓国仏教界ではまったくの無名のまま、一生を終えた人物である。Y寺自体、地元の少ない信者に支えられつつ、ほそぼそと続いている小さな寺である。いわばA師、Y寺自体、韓国のいたるところに見られ、気がつくといつものまにか姿を消しているような、ありふれた寺の住職であったと言い得るかもしれない。さらに言えば、A師について残された記録も決して豊かとは言いが得ない。A師の妻であり、Y寺の現住職であるB師を通し、A師が語った言葉、Y寺に残されていた断片的な記録、A師が日本で購入した書籍、がすべてである。日本留学時代の写真は一枚も残っていない。

本稿で、A師を取り上げる理由は、まさにA師の「無名性」にある。日本の植民地期に朝鮮半島という地理的空間に移動し、ふたたび韓国に戻った、あるいは移動先にとどまり続けた朝鮮人（韓国人）はそれこそ数百万人に上ると考えられる。移動の契機は様々であった。留学、強制徴用、経済的困窮からの移動、経済的な機会をもとめた者もいただろうし、日本の植民地支配への抵抗のための移動もある。むろん、このような移動の背後には日本の植民地支配という状況があったことは疑うべくもなく、否応なしに朝鮮の人々は自らが望まなかった近代的状況の中に投げ込まれたのである。そのような人々については、これまで「日本の植民地支配の犠牲者」として言及され、日本植民地支配の圧政のもとで苦しむ大多数の「民衆」として描かれてきた。そして、韓国の「民族史観」は、当時の朝鮮半島の人々を3つの区分に分類し、記述する傾向にあった。植民地支配に協力したごく少数の「親日派」、果敢に植民地支配に抵抗した「独立運動家」、そして、植民地支配に苦しみ、多数の沈黙した犠牲者であった「民衆」である。

日韓の植民地支配をめぐる近年の見解の相違は、朝鮮半島の人々にとって日本の植民地支配がもたらした「近代」が是か非かという点にある。つまり、一部の日本の論者は、日本の植民地支配によって朝鮮半島が近代化されたのであり、現在の経済的成功の基盤となったのだと主張し、これに対して韓国側が激しく反発する状況がある。ただし、両者の議論とも朝鮮半島の「近代化」は避け得ないと見なし、それを肯定する点で一致している。

植民地支配によって朝鮮半島にもたらされた「近代化」が「正しいか否か」という論点なのであり、両者とも、マクロレベルでの近代的認識を共有することでは一致している。

一方で「犠牲者」として一括りにされる民衆は、植民地支配という状況の中でそれぞれの生活を展開していたのであり、彼らにとっては植民地支配によってもたらされたのは「よき近代化」なのか「悪しき近代化」なのかという問いの前に植民地支配という現実と直面した。つまり、マクロレベルの認識とは別に、個々の現実認識とそこでの選択、生活の実践が、彼らにとっては直面す

生の現実を個々に引き受けざるを得なかった。例えば、生まれ故郷を離れ、他郷に暮らす、日本に渡航する、徴用される、日本軍に入隊するなどの現実を個々に引き受けるしかなかった。

さらに言えば、植民地支配からの解放後には、自らが植民地期にいかなる選択をおこなったかの結果は、個々に引き受けざるを得なかったであろう。そのような人々の生の記録は多くの場合、残されていない。

本稿で取り扱うA師も、またそのような一人である。ただし、他と異なる点があるとするならば、それは彼が朝鮮仏教（韓国仏教）の僧侶であったという点である。朝鮮仏教（韓国仏教）は、植民地期の日本の宗教政策、これに対する解放後の韓国の文化・宗教政策の中で大きく翻弄されてきたという歴史的過程がある。

3. 植民地支配期：朝鮮仏教の「近代化」におけるエリートとしてのA師

A師は1911年9月20日に忠清北道X郡のX邑近くにある村でM家の次男として生まれた。1924年、13歳の時にX郡の近くにあり、韓国仏教の本山のひとつである法住寺で、朴炳來和尚から得度を受けている。彼の生家についての記録は少ない。ただ、非常に貧しい農家であったため、「口減らし」のために寺に出されたと言う³。

遺されている資料には、生家M家について言及されている資料はない。また現在のA師遺族と生家との関係は、彼の属す門中が発行する「会報」が来る程度であり、ほとんど絶えている。4代前までの近しい親族を祀る祖先祭祀、父親の祭祀にもA師の長男は参席することがなく、ただA師の命日に妻B師、その子供たち、長男C、次男Dの家族が集まり、Y寺で故A師に対する祭祀が僧侶を交えた仏教式で行われるのみである。このような状況から見て、A師は得度し、仏門に入ったことにより、その生家であるM家との関係が疎遠になったと言えよう。

A師が仏門に入った時期の朝鮮半島は、1910年の韓国併合後、植民地型経済への再編が進んだ時期である。特に1910年から1918年までおこなわれた土地調査事業によって、土地の所有権、価格が確定され、土地の売買や抵当設定が法認された。このことにより、土地が流動化し、多くの農民が小作農に転落し、さらに離農、離村する状況にいたった。A師の生家もこの時期に離散したようであり、X郡を離れている。また、1919年には「三・一独立運動」が朝鮮半島全島で勃発し、X郡の隣郡でも「抗日義兵運動」が起き、朝鮮全土が騒然とし

3 A師の妻で現住職のB師談

ていた。

独立運動の騒擾の一方で、A師は仏教の修行に専念していたようである。得度から3ヶ月を経て、1923年7月15日に同じく法住寺で沙弥戒を受ける、これにより正式に仏教教団の一員として、寺院での修行を深めることになった。そして2年後の1925年の4月15日に法住寺で「首先安悟」の修行過程を終える。

この時期のA師の日常は、寺院の外の騒擾とは没交渉に、教学を深める傍ら、座禅による修養、そして寺の校務に務める静かな毎日であったらしい。一方でA師が修行を深めていた時期の朝鮮仏教は日本の植民地支配により、その社会的・文化的地位が動揺し、大きく揺れ動いていた。

植民地期以前、朝鮮王朝時代の仏教は、崇儒排仏政策の中でしばしば儒教から圧迫され、僧侶は社会の周辺的位置に置かれていた。仏教教団や僧侶は、教団としての独自性や存在を法的制度においてすら、しばしば無視されることがあった。

その一方で、この時期の仏教は国家の支配制度から排除されることにより、民衆の宗教として民間信仰を取り入れつつ、民衆、特に女性に浸透し、民衆仏教としての基盤を固めた。一方で民衆の日常生活の要求に過度に応えた場合、民間信仰やシャーマニズムと融合し、仏教の教理体系から逸脱し、民間信仰に取り込まれる可能性がある。このため、朝鮮仏教は、民衆の要求に応えつつも、仏教独自の世界観、教学体系を維持しなければならないという難問に直面することになる。

この解決のため、朝鮮仏教は、僧侶の中に二種類の階層をもつに至る。一方は、「理判僧」と呼ばれる少数のエリートであり、修行と参禅、教学研究に専念した。彼らは山中に隠棲し、民衆との直接の関係をもつ機会は少なかった。この理判僧の存在によって朝鮮仏教の教義、戒律、儀礼が維持されたのである。この理判僧の系譜が植民地解放後に比丘派の中核の僧侶たちに受け継がれる。比丘僧はある意味でもととの宗教エリート（予備軍）であり、本山や大寺、修行道場に集まっていた。他方は、「事判僧」と呼ばれ、教団において多数を占める一般の僧侶である。彼らは僧侶の地位を承認する「度牒」がなく、俗人に近く、朝鮮王朝の身分制度においてはしばしば賤民階級に位置づけられる存在であった。しかし事判僧は民衆が求める信仰や儀礼に直接対応し、民衆の中に仏教が浸透する上で大きな役割を果たしていた。この事判僧は身分制度において劣位に置かれていただけではない。教義や儀礼についての専門的訓練を十分に受けておらず、仏教教団内部においても劣位に置かれていた。

A師は、その出発点が事判僧であった可能性もあるが、修行への熱心さや才能を認められたようである。朝鮮王朝時代ならば、彼は五大本山の一つである法住寺に所属する理判僧として朝鮮仏教の中核を担う宗教エリートとして、俗

世間から離れた山中の修行寺院で信者の尊敬を受けながら、静かな一生を送ったことであろう。しかし日本の植民地支配は、朝鮮仏教の地位や状況を劇的に変化させており、A師もその変化の波からは逃れることができなかった。

開国と前後し、まず日本仏教の朝鮮布教が開始され、例えば真宗大谷派は1877年に布教を開始し、1920年までに65布教所を設置している。日本仏教の朝鮮半島への進出は、仏教の社会的地位上昇への圧力を伴っていた。日本仏教界は、布教と平行し、日本仏教界は仏教の地位を向上させる政策を朝鮮王朝、後の大韓帝国にせまった。1895年に王朝の首都である漢城への僧侶入城禁止を解禁するようにせまり、また、法制度の一部に組み込むことで、仏教の存在を公的に認めさせようとした。これがいわゆる「寺刹令」(1902年)である。「寺刹令」の施行は仏教が行政の対象として管理統制を受けるようになる反面、僧侶・寺院の存在を公認することを意味した。

植民地期に至って、日本仏教の主導による朝鮮仏教の「近代化」がはかれるようになる。1911年、朝鮮総督府による「寺刹令」が施行される。これは日本式の本山-末寺制度、住持制度を導入し、さらに、寺院の財産を認めたものであった。朝鮮仏教は、日本植民地統治下で中央集権的統制を受け、民間信仰との分離が強要される。明治期に日本仏教の諸派が大学を含めた学校制度を整え、教学教育に近代的な教育課程を備えた動きにならって、朝鮮仏教も僧侶養成の学校を設置し、新しい時代の宗教エリートを養成しようとした。

A師においても、このような朝鮮仏教の「近代化」の波が訪れることになる。A師は1934年9月1日(23歳)に、法住寺佛教専門講院の中等科を卒業した。そして1939年10月15日、28歳で朴鏡荷和尚から具足戒を授かる。朝鮮時代、僧侶の修行は、座禅や托鉢、寺院での儀式への参加と習得、師について教学体系を学ぶことであった。ところがA師はこうした伝統的修行だけでなく、教団内に設立された「学校」で学んでいる。このような「学校」を卒業することが教団における宗教エリートに必要な「修行過程」となったのである。そしてA師は1940年には法住寺の位階でも上位の大徳法階に昇るに至る。その時、A師はまだ39歳であった。

日本植民地期には、僧侶の社会的地位の上昇、経済的安定、布教の奨励など、キリスト教や儒教と比較し、優遇された面もあったことも否定できない。こうした朝鮮総督府の支配政策に、一部の僧侶は協力的であり、寺院において「天皇陛下聖寿万歳ノ尊牌」を本尊前に安置し、毎日拝礼する「天皇尊牌の毎日祝賛」や紀元節、天長節などを寺院の行事とする「法式日」の実施などの総督府

指示に従った⁴。こうした植民地主義的政策は、すでに日本仏教が日本国内で行っていた事になったとも言えよう。

A師は、その後、日本の植民地支配という枠組みの中での、朝鮮仏教におけるいわば宗派のエリートコースを歩むことになる。A師は1942年から日本の花園臨済仏教専門部（現在の花園大学）に留学し、1944年に全課程を修了して帰国する。こうした留学の費用は宗派から支給された。当時、1937年より始まった日中戦争が泥沼化し、1939年には日本国内に不足した労働者の募集が始まっていたが、1941年の太平洋戦争勃発により、1942年には官斡旋式の労働者徴用、1944年には国民徴用令の適用に伴い、強制連行、強制労働が開始されていた。戦時下体制の中で日本に多数の朝鮮人が徴用、動員される中で、31歳のA師は留学という形で日本に渡ったのである。A師の日本での留學生活の様子、あるいはA師が当時の社会情勢、さらには高まる独立運動に対し、どのような考えをもっていたか、そのことを知りうる資料はない。ただ、当時A師が日本で使用したと思われる日本の仏教書に細かく書き込まれた日本語の説明が残されているのみである。

4. 解放後：日本仏教の影響を受けた「親日派」妻帯僧としてのA師

1945年、太平洋戦争が終結した後も、朝鮮半島の情勢は安定しなかった。1950年には朝鮮戦争が勃発し、国内の混乱は一層激しくなった。そうした混乱の中でA師は1947年に本山の中央総務院で教化運動指導者修練講習を修了し、教団組織の中で中堅的な役割を占めるようになる。

日本の植民地支配から解放されたとは言え、植民地期に持ち込まれた「近代化」がすぐさま霧散したのではなかった。その影響は解放後も社会に広範囲に浸透し、拡散した面もある。それは脱植民地運動の中で激しい批判の対象となった。たとえば、朝鮮仏教における僧侶の妻帯の問題はそうした問題のひとつである。

日本仏教の影響による「近代化」は、朝鮮仏教にその基盤を揺るがす変質をもたらすことになった。それは「宗教教団の近代化」ではなく、明治期にキリスト教の進出、国家神道の形勢などに対応した、日本仏教のローカルな脈絡で構築された「近代化」であった。ゆえに朝鮮仏教の地位が向上した一方で、「近代化」とは無関係な日本仏教の慣習が持ち込まれるようになる。僧侶の妻帯は、日本仏教の慣習の中で朝鮮仏教に最も大きな影響を与えたひとつである。妻帯は日本仏教においては一般的であるが、朝鮮仏教においては僧侶であるための

4 韓哲曦.[1983].『日本の朝鮮支配と宗教政策』 未来社

もっとも重要な戒律に対する違反にあたる。ところが植民地期の朝鮮仏教は、仏教の地位向上、つまり仏教の「近代化」、これは文字通りの「近代化」というより「日本化」をある意味で主体的に取り入れざるを得なかったのである。

A師は、解放の翌年、1946年にB師と結婚し、いわゆる妻帯僧となった。この時期のA師は、教団における地位が順調に上昇し、1958年には忠清北道宗務院教務局長、曹溪宗の中央宗会員となり、さらに1960年、本山法住寺の宗務院財務局長にまで至る。その一方で、1951年に40歳になったA師は個人の庵をX郡X邑に設け、一般信徒への布教活動や儀礼をおこなうようになる。この庵には妻であるB師、子供たちがともに暮らし、庵の創立に際して、A師を慕っていた信者たちの協力があった。そして1960年、順調に教団内の地位があがったA師は、本山法住寺の宗務院財務局長という要職に昇る。

ところが1962年3月3日、52歳になったA師は、突如、教団の役職を退き、法住寺に籍を置いたままで小さな地方寺院にすぎない「萬善庵」の住持となる。この「萬善庵」はA師の家族が住んでいた住居であったX邑の庵を寺院としたもので、まことに小さな地方小寺院である。当時、本山および政府に提出した仏教団体登録申請には、僧侶1名（A師）そして信徒男15名、女40名が信者として登録がなされている。その経済的基盤は、水田63坪、畑144坪であり、これらは信者から寄進された。

このように寺院の住持がその代表権とともに財産権をもつことは朝鮮時代にはありえなかった事である。朝鮮時代を通し寺院の経済基盤は非常に不安定な状態に置かれていた。崇儒排仏政策の中で、何度も寺社田の整理が実施され、国家に没収され、寺社田として所有できる農地も僧侶の数に応じて限られていた。各寺院は自給自活的な生活と寺院の活動を可能にできる程度の寺田を所有し、これを経済的基盤とした。これら寺田を始めとする財産は寺院に所属していた。

この状況が変化するのが植民地期である。総督府は1911年に「寺刹令」を発令、施行する。「寺刹令」では各寺院に住持を置くことを定めただけでなく、住持に寺院に属するすべての財産の管理権、寺院の運営の責任、代表権を与えた。同時に寺院財産の処分に関しては総督府の許可を義務づけたのである。ある意味で「寺刹令」は公権力と仏教間の関係を規定した「近代的」法律であった。この「寺刹令」は住持の地位を強化すると同時にその任免にあたって総督府ないし地方長官の許可を必要とした。このことで総督府による住持を通した寺院の統制、末端僧侶への支配を可能にした。一方で「寺刹令」施行の結果、寺院の財産の所有が認められ、経済的基盤が安定する。そして各寺院の住持はこれまでにない経済力と強い権力をもつようになったのである。そして「寺刹令」は本山と末寺のヒエラルヒーを明確にし、それまで組織化されていなかった朝

鮮仏教に「近代的な教団組織」への移行をうながしたのである。「寺刹令」は解放後も1970年代に至るまで長らく効力を持ち、その後の改正でも抜本的な変革には至っていない。

A師はこの萬善庵の住持に就任することを、住持職の印鑑を曹溪宗教団の印鑑台帳に届け出て、承認を受けるという手続きをとってはいるが、実質的に萬善庵の財産権を持っていた。A師の萬善庵は、A師とその家族を中心に、それを取り巻く篤信の信者たちが支えたささやかな小寺院である。ただし、その法的な根拠、さらには寺院の住持就任に教団の承認が必要であるといった本山—末寺制度のありようは、日本の植民地期に日本仏教の影響、そして総督府の宗教政策によって朝鮮半島に持ち込まれたものである。ゆえに、A師の没後、Y寺と改称していた萬善庵の財産を妻であるB師が継承できたのである。

ところで、A師が本山の要職を突然退いた背景には、1950年代から韓国仏教を揺り動かした「妻帯僧」問題がある。妻帯僧問題とは、解放後の韓国仏教において「仏教浄化運動」の焦点となっていた。

この「仏教浄化運動」は植民地統治期に急増した妻帯僧を教団内部から追放しようという運動であった。この背景には日本植民地統治の残滓を一掃し、民族文化（国民文化）を確立しようという民族主義の高揚がある。そして仏教浄化運動においては、純粋な韓国仏教を汚染する代表である妻帯僧を排除すべきという主張がなされた。妻帯僧は日本の植民地統治によってもたらされた日本仏教（倭色仏教）の不純な要素であるという理由による。この仏教浄化運動は脱植民地運動のひとつとみなされることが一般的である⁵。

まさにA師はこの妻帯僧であり、しかも日本に留学して日本仏教を学んだという点で「倭色仏教」の僧侶として批判の対象であった。この当時のA師の遺品には当時の妻帯僧問題に関連した新聞記事や、この問題をめぐって発行された教団の内部資料が多く遺されている。そして、A師は妻帯僧問題をめぐる教団内の対立が本山のみならず、地方寺院まで波及し、激化した時期に、本山の役職を辞任し、地方の小寺院の住持になったのであった。

この妻帯僧問題は当時の韓国社会における「脱植民地」運動と民族意識の高揚を背景にしている。当時の李承晩政権は反日反共をスローガンに据え、植民地期の日本の影響を排除しようとしていた。そこに、教団の運営をめぐり、植民地期より引き続いて教団運営の中心を担っていた「妻帯僧派」に、独身主義の「比丘派」が朝鮮仏教の純化、民族仏教への回帰を唱え、「妻帯僧派」を排除

5 なお、妻帯僧問題について筆者は岡田(2002)で詳しく論じており、そちらを参照されたい。

し教団運営を掌握しようとして起きたのが、妻帯僧問題である。これは時には流血の暴力事件にまで至ることもあり、韓国仏教界に激しい対立と混乱をもたらした。

この時期について遺された様々な文書には、判読が困難なものの、A師によってさまざまな書き込みがなされている。少なくともA師が当事者として大きな関心をもっていった事がそれらの書き込みからうかがうことができる。「仏教の本義に戻るべし」「仏教とはなんぞや」といったメモには、A師の苦悩する姿がかいま見られる。

A師が萬善庵の住持になった1962年の前年には、軍事クーデターにより朴正熙大統領が政権を握る。以後、韓国は政府主導の近代化を進めると同時に、「反日、反共」をスローガンに掲げ、「民族文化」を国民文化として構築していく方向に進んでいくのである。

A師の萬善庵、Y寺は後に曹溪宗から太古宗に所属宗派を変更した。以前から彼が所属していた曹溪宗は、妻帯を認めない曹溪宗と妻帯を認める太古宗に分裂し、A師は太古宗に移ったのである。この太古宗は、現在でもなお「日本仏教」(倭色仏教)と揶揄され、日本の植民地支配によって墮落した韓国仏教として批判されることがある。かつてエリートとして教団の近代化を担うべく日本に留学したA師は、この後、X邑のY寺において地方の小寺院の住職として無名のまま残りの生涯を送った。そして1979年、朴大統領が暗殺され、80年代後半の民主化運動の高揚へと韓国社会が大きく舵をとる。この年の翌年の1980年、A師は妻であるB師に看取られながら69歳の生涯を閉じることになる。

5. おわりに

筆者はいかなる場合でも植民地支配は正当化されるべきではないと考える。ただ、今日的現象に関する韓国側の「反日」や「克日」という語りと、これに対する日本側の賛同、反発の語りの双方とも、与することはできない。この両者には、植民地支配が韓国社会にどのような影響を与え続けてきたのかについての慎重な検討が欠落している気がしてならないためである。両者とも植民地支配の影響という複雑な文化・社会的変化を加害者と被害者に二項対置する枠組みに収斂するものである。また植民地支配から解放された後の「ポストコロニアル状況」の問題を、「よい近代化」か、「わるい近代化」か、という二項対置的視点から単純化して議論する傾向があるような気がしてならない。

韓国社会に多く見られる言説は、一方に受動的に植民地統治に虐げられた被害者、あるいは植民地統治に抵抗し続けた勇敢な民族主義者を置き、一方に植民地支配によって利益を得た加害者として植民地統治に協力的な反民族主義者

(親日派)を置き、そのどちらかに位置づける⁶。民族主義、ナショナリズムの語りを前提とした二元論的枠組みに人々は分類される。

この二元的枠組みは、人間だけでなく、モノや慣習についても民族的、韓国的(純粹)に対し、植地的、日本的(不純)という形で適用される。これは植民地期の経験を基準として人間、モノ、慣習について分類、価値付けることである。この二元的枠組みは「反日」「克日」の民族主義の言説として韓国社会に深く流布してきた。

しかし、ここで取り上げたA師のささやかな事例は、こうした二元的枠組みに収まらない韓国社会における複雑な植民地支配経験、反植民地、脱植民地状況の一端を示す事例といえるのではないだろうか。

貧窮の中で育ち、その才能を認められ、朝鮮時代の理判僧にあたる宗教エリートとして将来を嘱望されたA師は、朝鮮仏教が日本仏教になって「近代化」しようとした際に、その中心を担う者として日本に派遣された。ただし、日本仏教が持ち込んだ「近代化」はいわゆる「近代性(モダニティ)」にとどまらなかった。欧米の「知の支配」を受容、対抗して日本が朝鮮半島に持ちこんだ「近代化」であった。すなわち、一方で日本は欧米の「近代化」(ある種の知の植民地状況)を受容しつつ、独自のバイアスをかけた「日本的近代化」を構築し、その内部には日本社会の現実と近代化の理念が矛盾をはらんだまま混在していた。

このバイアスとそれがもたらす矛盾が表面化した典型が、妻帯僧問題なのである。僧侶が妻を娶うことは「仏教の近代化」とは直接の関連はない。しかし、「近代化」を志向した朝鮮仏教は、そのような矛盾をはらんだ日本仏教の状況を含めて「近代化」として取り入れざるを得なかったのである。

そして解放後の脱植民地運動の高揚、民族文化の高揚の中で、「日本的なもの」は排除すべき植民地主義的要素と位置づけられるようになる。植民地期に持ち込まれた「近代的要素」は、民族、国家の目標として掲げた「近代化」とは異なる「不純物」とせねばならなかった。しかし、植民地主義的要素は生活レベルに至るまで、深く「近代」と結びついており、それを強引に排除しようとした時に、人々は戸惑い、葛藤が起きたのである。

A師はまさにそのような植民地主義と「日本的近代」、その後の脱植民地運動といった歴史的な変化に翻弄された人物のひとりと言えよう。そして二元的枠組みの中で、A師は「親日派」として非難されるべき生涯を送った人物と位置

⁶ これに対する日本側の対抗言説は、韓国人は虐げられたのではなく、近代化された面もあり、植民地支配はその後、韓国の発展の礎となったというものである。

づけられてしまう。

そして今日、植民地支配下でもたらされた「日本的近代」を排除しつつ、民族独自の近代化を推し進めてきた韓国社会が大きな転換期を迎えている。それまで想像もしなかった諸問題、例えば外国人労働者問題やフェミニズムからの「民族文化」に対する異議申し立て、などが起きるようになった。民族主義、ナショナリズムを前提として推し進められてきた韓国の「近代化」がグローバル化の中で再検討をせまられるようになったのである。

そして、韓国人は自らが構築してきた「近代韓国社会とは何か」という問題を自問せざるを得なくなっている。この自問は同時に韓国社会において「近代」とは何か、「近代性」とは何かという問いかけをもたらす。そして、その背後に隠れている「鬼神」、すなわち日本の植民地支配によってもたらされた「近代」「近代性」とは何かという問いを呼び起こすのかもしれない。

韓国のシャーマニズムにおいては「鬼神」は、関係する家族、親族がきちんと供物を捧げ、諸神諸仏の力を借り、祀るクツを行うことでその荒ぶる魂を癒すことができるとされる。はたして、日本の植民地支配がもたらした「鬼神」を鎮めるためには、どのような「クツ」が必要なのであろうか。

参考文献

- 韓哲曦. 1983 『日本の朝鮮支配と宗教政策』 未来社
青柳南冥 1911 『朝鮮宗教史』 駸々堂 大阪
韓哲曦. 1983. 『日本の朝鮮支配と宗教政策』 未来社。
姜渭祚（澤正彦・轟勇一訳） 1976 『日本統治下 朝鮮の宗教と政治』 聖文社
金甲周 1991 「李王朝の仏教弾圧」 鎌田茂雄編. 『講座 仏教の受容と変容 韓国』 校成出版 229-252 頁
駒込武 1996 『植民地帝国日本の文化統合』 岩波書店
岡田浩樹 2002 「韓国仏教の屈折と蛇行—妻帯僧問題に見るポストコロニアル状況」 山路勝彦、田中雅一編著 『植民地主義と人類学』 関西学院大学出版会。
森龍吉編 1975 「解説」 『真宗史料集成 第十二巻 真宗教団の近代化』 同朋社 7-29 頁
吉川文太郎 1921 『朝鮮の宗教』 森書店 京城

◆研究所の活動◆

(2004年1月1日-12月31日)

- ◎ 南山大学人類学研究所第7期長期研究プロジェクト『アジアにおける市場(market)をめぐる固有論理に関する学際的研究』

2004年3月26日(土)

テーマ：「イラン社会の公益とガバナンス—宗教組織を中心に」

(中西久枝・名古屋大学大学院国際開発研究科教授)

テーマ：「日本の地域通貨の社会的機能」

(伊藤友美・名古屋大学大学院国際開発研究科修士課程・南山大学文学部人類学科卒)

○本プロジェクト関連で受けた研究助成

- ① 東海学術振興会研究助成(2001年度)
- ② 2002年度南山大学経営研究センタープロジェクト助成
- ③ 2003年度南山大学経営研究センタープロジェクト助成

◎ 講演会

第一回：2004年11月5日(金)

場所：南山大学J棟1階Pルーム(特別合同研究室)

講師：Dr. Wilton S. Dillon (Senior Scholar Emeritus, Smithsonian Institution, National Museum of

Natural History, Washington D.C.)

テーマ：“Margaret Mead’s Uses of Imagery”

第二回：2004年11月26日(金)

場所：南山大学J棟1階Pルーム(特別合同研究室)

講師：色音(中国社会科学院民族研究所研究員、教授)

テーマ：「中国におけるシャーマニズム研究の歴史と現在」

◎ 懇話会

日時：2004年7月16日(金)

場所：南山大学人類学研究所1階会議室

講師：西澤治彦(武蔵大学教授)

テーマ：「内地回民の移住と回民社会の展開——南京回族の調査から」

* * * *

◎ 研究所員の活動

○ 森部一(2004年度所長)

I. 出版活動

1) 事典項目

* 「森部一(もりべはじめ)『タイの上座仏教と社会—文化人類学的考察』山喜房佛書林、1998」(p. 647) 小松和彦、田中雅一、谷泰、原毅彦、渡辺公三編『文化人類学文献事典』東京：弘文堂 2004年12月

○クネヒト、ペトロ

I. 出版活動

1) 論文:

*“*Kuchiyose*: Enacting the encounter of this world with the other world.” In *Practicing the Afterlife: Perspectives from Japan*, eds. S. Formanek and W. R. LaFleur, 179-201. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2004.

*“Japan.” In *Religionen und Kulturen der Erde. Ein Handbuch*, eds. A. Grabner-Haider and K. Prenner, 192-207. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2004.

*「中国東北部のシャーマンについて」クネヒト・ペトロ編『中国東北部におけるアルタイ語族の諸民族のシャーマニズムと社会に関する人類学研究』、84-95。南山大学人文学部（人類学研究所）研究成果報告書科学研究費補助金基盤研究（B）（1）平成 12 年度—平成 15 年度、2004 年。

*“Fieldwork among shamans in China.” In *Shamanism in the Interdisciplinary Context*, eds. A. Leete and R. P. Firnhaber, 256-63. Boca Raton, FL: Brown Walker Press, 2004.

2) 事典項目:

*“Overview: Korea and Japan.” In *Shamanism: An Encyclopedia of World Beliefs*, eds. M. N. Walter and

E. J. Neumann Fridman, 653-655. Santa Barbara: ABC-CLIO, 2004.

* “Japanese Shamanism.” In *Shamanism: An Encyclopedia of World Beliefs*, eds. M. N. Walter and E. J. Neumann Fridman, 674-681. Santa Barbara: ABC-CLIO, 2004.

3) 書評:

* Helen Hardacre. *Religion and Society in Nineteenth-Century Japan: A Study of the Southern Kanto Region, Using Late Edo and Early Meiji Gazetteers*. Ann Arbor: The University of Michigan, 2002. *Asian Folklore Studies* 63, 2004, 146-148.

II. 学会、研究会発表

*「モンゴルのシャーマンと民間医者」府中市、東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所、日本文化人類学会第 38 回研究大会、6 月 5 日。

*“Who is the keeper of tradition? Reflections about shamans in northeastern China.” The 7th Symposium of the International Society for Asian Folklore, Gangneung, Korea, 10 June.

*“A year’s ritual cycle in Japan: The work of humans and divine spirits.” Traditional Cosmology Society Conference “The Ritual Year,” University of Edinburgh, 9 July.

*“Some reflections on contemporary shamans and their

social environment: A brief report on ongoing fieldwork in Inner Mongolia." The International Conference of Manchu Language and Culture Studies & The 2nd International Conference of Tungus Languages and Culture Studies, Hailar, 17 August.

*「モンゴルのシャーマンと民間医者」 The International Conference of Manchu Language and Culture Studies & The 2nd International Conference of Tungus Languages and Culture Studies, Hailar, 18 August.

*"Shamans in shamanless times." The 7th Conference of the International Society for Shamanistic Research, Changchun, 22 August.

*"Shamans in shamanless times." International Workshop. Institute of Social-Cultural Anthropology, Xinjiang Normal University, Ürümqi, 30 August.

*「<シャーマンのない時代>にシャーマンであること」中央民族大学蒙文系、北京、9月8日。

Ⅲ. 研究助成、賞

1) 南山大学短期海外研究助成、2004年8月10日—9月10日。

2) 賞: Diploma and Medal. International Society for Shamanistic Research, Changchun, 25 August.

○宮沢千尋

I. 出版活動

1) 論文:

*「ベトナムの家族、親族、家譜」今井昭夫、岩井美佐紀他編著『現代ベトナムを知る 60 章』明石書店 (151-155)

*「農業行政組織与農業合作社」白石昌也編著、畢世鴻訳『越南 政治、経済制度研究』雲南大学出版社 (215-241) (2005年12月発行)

*「ベトナムの土地問題 (北部・中部を中心に)」『文部省科学研究費特定領域研究 Working Paper8』32p

Ⅱ. 研究助成、賞

*南山大学パツヘ1-a-2研究奨励金
「『親日派』ベトナム民族主義者にとつての『国家』『民族』『文化』」

* * * *

(2005年1月—12月の活動)

◎ 公開講演会

第一回: 2005年6月3日 (金)

場所: 南山大学 E 棟 11 教室

講師: 遠藤央 (京都文教大学人間学部・文化人類学研究科教授)

テーマ: 「ミクロネシア・植民地主義・中島敦—パラオの人びとと日本の関係」

第二回：2005年6月24日（金）
 場所：南山大学J棟1階Pルーム（特別合同研究室）
 講師：岡田浩樹（神戸大学国際文化学部助教授）
 テーマ：「植民地の記憶とねじれた「近代化」－日本と韓国のポストコロニアル状況についての人類学的試論」

第三回：2005年10月21日（金）
 場所：南山大学J棟1階Pルーム（特別合同研究室）
 講師：上水流久彦（県立広島大学地域連携センター助手）
 テーマ：「台湾社会にみる<日本>像」

第四回：2005年11月25日（金）
 場所：南山大学E棟24教室
 講師：轟莉莉（東京女子大学現代文化学部教授）
 テーマ：「中国民衆の戦争記憶－旧日本軍による細菌戦をめぐる」

◎ 懇話会

○日時：2005年3月15日（火）
 場所：南山大学人類学研究所1階会議室
 テーマ：“Izumo as the ‘other Japan’: Construction vs. reality”
 講師：Klaus ANTONI（Professor, Universität Tübingen, Seminar für Japanologie）

○日時：2005年7月14日（木）
 場所：南山大学人類学研究所2階会議室

講師：ナジムラ（那木吉拉）（中央民族大学モンゴル言語文学系教授）
 テーマ：「中央アジア諸民族の狼信仰について」

○日時：2005年11月8日（火）
 場所：南山大学人類学研究所1階会議室
 講師：芹澤知広（奈良大学社会学部助教授）
 テーマ：「香港における街頭募金の人類学的研究－1990年代のフィールドワークから－」

* * * *

◎ 研究所員の活動

○坂井信三（2005年度所長）

I. 出版活動

1) 論文：

* 「西アフリカのタリーカと社会変動下の集団編成」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹編『イスラーム神秘主義と生者信仰』イスラーム地域研究叢書7巻、東京大学出版会、（205-226）

* 「西アフリカ内陸における宝貝の流通と交換」宮沢千尋編『アジア市場の文化と社会』南山大学人類学研究所叢書、風響社（219-25）

寄稿：「嶋田氏の書評に対して」『文化人類学』70-3

○クネヒト、ペトロ

I. 出版活動

1) 論文

* Who is the keeper of tradition?
国際亜細民俗学会編『世界無形文化遺産と民俗芸術』江陵市、国際亜細民俗学会、2005年9月、(47-53) (韓国語)

* 「大興安嶺のトナカイ・エウエンキの交易 (ボグショル) について」宮沢千尋編『アジア市場の文化と社会—流通・交換をめぐる学際的まなざし』東京、風響社、2005年、(157-189)

* 「「虫」の居所——「腹」と「胸」をめぐる(上)」『アカデミア』人文・社会科学編80号、2005年1月30日、(52-56) (共著: 長谷川雅雄、美濃部重克、辻本裕成)。

* A year's ritual cycle in Japan: The work of humans and divine spirits. *Cosmos*, volume 18, 2002, (3-17). (2005年8月発行)

II. 編集協力

Editorial advisor. William M. Clements, Editor. *The Greenwood Encyclopedia of World Folklore and Folklife*. 4 volumes. Westport, Connecticut, Greenwood Press, 2006.

III. 学会発表

* 「宇宙樹について」南山大学、環太平洋比較神話研究会、4月23日。

* 「大興安嶺のトナカイ・エウエン

キの「最後のシャーマン」」札幌市、北海道大学、日本文化人類学会第39回研究大会、5月21日

* *Ise sankei mandala and the image of the Pure Land*. The 11th International Conference of EAJS, University of Vienna, Vienna, 1 September 2005.

* Problems in preserving an old festival: *Hanamatsuri*. The 8th International Conference of the Asia Folklore Association, Hanoi, Guest House of the National Assembly, 26 September 2005.

○宮沢千尋

I. 出版活動

1) 編著

『アジア市場の文化と社会—流通・交換をめぐる学際的まなざし』260p 風響社 2005年11月

2) 論文

* 「序論—アジア市場の社会と文化の理解にむけて」『アジア市場の文化と社会—流通・交換をめぐる学際的まなざし』(11-26) 風響社 2005年11月

* 「ベトナム北部・红河デルタ村落における文化と経済発展の関係」『アジア市場の文化と社会—流通・交換をめぐる学際的まなざし』(191-218) 風響社 2005年11月

3) 書評

* Nguyen Van Huy and Laurell Kendall. Vietnam: Journeys of Body,

Mind and Spirit. Berkeley:
University of California Press. 2003
Asian Folklore Studies 64, 2005,
337-338.

II. 学会発表

* 「再来日後のクオンデの抗仏活動
と日仏秘密情報交換について」東南ア
ジア史学会 2005年6月4日 愛知
大学車道校舎

* Tu tuong Dai Dong o Viet Nam
Dau The Ky 20. The 8th
International Conference of the Asia
Folklore Association, Hanoi, Guest
House of the National Assembly, 26
September 2005.

* Phong trao Chong Phap cua
Nguoi Viet Nam o Nhat Sau Phong
trao Dong Du. Vietnam· Japan
Cultural and Educational Relations
and the Centenary Commemoration
of Dong Du Movement, Hanoi,
University of Social Sciences and
Humanities, 21 November 2005.

◆研究所内部の研究会等◆

◎ 東アジア民俗文書研究会
東アジア諸国の地方文書を読む会
月一回開催。現在、ベトナムの「大同
経寶」を解説。
参加者 笠井直美（名古屋大学）、松
尾信之（名古屋商科大学）、中塚亮（名
古屋大学大学院）長坂康代（名古屋大
学大学院）、宮沢千尋

◎第8期長期プロジェクト予備研究会
仮テーマ「開発・近代化と宗教の「再
選択」

2005年6月25日

○坂井信三「西アフリカのイスラーム
と社会変動」

○吉田竹也「観光地バリにおける宗教
と観光の選択—その主体をめぐる予
備的考察—」

○宮沢千尋「社会主義国家ベトナムに
おける宗教と「宗教」

2005年7月29日

○川田牧人（中京大学助教授）「洞窟
の驚異：セブ市グアダルーペ・カルト
をめぐるまちづくりと宗教」

○森部一 「タイの「開発僧」を中心
とした「下からの開発」をめぐる覚書
—北タイ農村の事例の紹介と今後の
課題の提示」

○編集後記○

昨年度は事情があって発行できな
かったこの『通信』であるが、今年度
はみなさまのご協力を得て、合併号と
いう形で発行にこぎつけた。みなさま
に感謝申し上げるとともに、人類学研
究所の活動をご理解いただければ幸
いである。（宮沢千尋）

ASIAN FOLKLORE STUDIES

Volume 63, 2004

ARTICLES

- Hmong Instructions to the Dead: What the Mouth Organ *Qeej* Says (Part one and two) Catherine Falk
- Speaking with Spirits: The Hmong *Ntoo Xeeb* New Year Ceremony
Hao Huang and Bussakorn Sumrongthong
- Shamanic Epics and Narrative Construction of Identity on Cheju Island
Kim Seong-nae
- Dreaming the Seven-Colored Flower: Eastern and Western Approaches to
Dreams in Chinese Folk Literature Howard Giskin
- The Scorpion in Muslim Folklore Jürgen Wasim Frembgen
- Oral Competition Narratives of Muslim and Hindu Saints in the Deccan
Nile Green
- The Long-Tailed Rat Ann Grodzins Gold
- Interpreting Untouchability: The Performance of Caste in Andhra Pradesh,
South India Simon Charsley
- Folklores of Sacred Khecheopalri Lake in the Sikkim Himalaya of India:
A Plea for Conservation Alka Jain, et al.
- Btsisi', Blandas, and Malays: Ethnicity and Identity in the Malay Peninsula
Based on Btsisi' Folklore and Ethnohistory Barbara Nowak, et al.

OBITUARIES

- Professor Lauri Honko (1932-2002): In Memoriam Lauri Harvilahti
- In Memory of Dai Buzhang (1925-2003) Vibeke Børdahl

BOOK REVIEWS

ARTICLES

- “Listen, Rāma’s Wife!”: Maithil Women’s Perspectives and Practices in the
Festival of *Sāmā Cakevā* Coralynn Davis
- Folk Culture and Urban Adaptation: A Case Study of the Paharia in
Rajshahi Md. Mustafa Kamal Akand
- Bridal Laments in Rural Hong Kong Yuk-ying Ho
- The Revival of Folk Religion and Gender Relationships in Rural China:
A Preliminary Observation Pui-lam Law
- Silkworms and Consorts in Nara Japan Michael Como
- Is it Clothes that Make the Man? Cross-dressing, Gender, Sex in
Pre-Twentieth Century Zhu Yingtai Lore Roland Altenburger
- Shuten Dōji*, “Drunken Demon” Noriko T. Reider
- Religious Revival as Reaction to Hegemonization of Power in Siberia in the
1920-40s Art Leete
- Staging a Ritual Dance out of its Context: The Role of an Individual Artist
and the Alevi *semah* Arzu Öztürkmen
- The Historical Relationship Between the Shawls of Gürün and Iran
Zahide Imer

RESEARCH NOTE

- The Dog Star and the Multiple Suns Motif: An Asian Contribution to
European Mythology Peter Metevelis

RESEARCH MATERIAL

- A Shaman’s Ritual Songs Sqingaowa Onon

OBITUARY

- Kristina Lindell (1928-2005): In Memoriam Magnus Fiskesjö

REVIEW ARTICLES

- Stories and Language of the Mantaoran
Erika Kaneko and Tsuchida Shigeru
- Research on Buddhist Nuns in Japan, Past and Present
Monika Wacker

COMMUNICATIONS

BOOK REVIEWS

年間購読料：6,000円（団体）、3,000円（個人）
購入や投稿に関するお問い合わせは以下へお願いします：

南山大学人類学研究所 Asian Folklore Studies 編集室
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18番地
Tel: (052) 832-3111（南山大学代表）
Fax: (052) 833-6157
e-mail: nuai@ic.nanzan-u.ac.jp